

# 成果報告書

記入日 2015年 11月 2日

氏名 瀬戸 徐 映里奈	渡航先国名 ベトナム社会主義共和国	所属機関 ベトナム社会科学院 南部社会科学院
研究テーマ：ドイモイ政策以後の在日ベトナム難民と本国間ネットワーク形成に関する研究		
研究期間： 2013年 9月～ 2015年 8月		
<p>研究成果（概要）：ドイモイ政策転換後、海外に「不法出国」したベトナム難民の本国帰還が許可されて、約30年が経過する。ベトナム社会の発展と日系企業の進出など越日関係が変わりゆくなかで、往来する人びとの状況や、本国社会や家族や親類と繋がりが2010年代に至るまでのどのように移り変わっていったのかを明らかにすることができた。</p>		
<p>研究成果（詳細）</p> <p>難民問題の解決には、受け入れ国で安定した生活を送れることが保障されるとともに、自身の故郷へ帰還が果たされる必要がある。しかし、難民の帰還がその後のネットワークや本国、地域社会にどのような影響をもたらすのかについては十分な研究蓄積がない。申請者は、87年にベトナム本国への一時帰国が許可されたベトナム難民の事例から、難民が本国とどのように繋がりなおし、どのようなネットワークを築いているのか、残った難民家族が地域社会のなかでどのように生活しているのかを家庭訪問による参与観察、インタビューによって明らかにした。（注：ここでのベトナム難民には、ポートピープルとして出国した人以外に、戦争やその後の社会混乱で帰国ができなかった元留学生やODP (ordinary Depature Programme ベトナム政府と UNHCR との間に締結された覚書。家族再会など人道的ケースにかぎり、出国が許可された。)によって、他国へ呼び寄せられた家族も含めている。ODP を利用せずに渡日した家族については、難民に含めていない。</p> <p>①難民の本国帰還- ベトナムの故郷で暮らす難民たち（2010年代前半の状況）</p> <p>当初は、留学前に日本での調査で出会ったベトナム難民の実家に訪問することのみを予定していたが、ベトナムへ渡航する際に日本での調査協力者から、日本に居住していたが現在ベトナムに戻って生活している複数の家族を紹介してもらうことができた。難民と本国間のネットワークの有り様を考えるために、その人びとにまずベトナム本国に生活の拠点を移した理由について聞き取りを実施した。</p> <p>- 50歳以上の一世代（6名うち、夫婦2組）：渡日一世の多くは、日本に受け入れられたあと、高い日本語能力が必要とせずとも就労が可能な製革工場などの肉体労働で生計をたてていた。しかし、不景気のあおりを受けて、2000年代後半からそれらの零細な工場が相次いで倒産し、失職していた。また、過酷な重労働によって体調を崩し、就労を継続できなくなった人もいた。失職や体調不良をきっかけに、生活費が安く抑えられるベトナムで過ごすことを決めたという。その生活費は不動産業によって賄われていた。90年代頃からベトナムに残った親類や兄弟と協力しあって、ベトナムの土地を購入し、そこにアパ</p>		

ートなどを建てて人に貸し、家賃を収入としていたのである。また、年老いた両親の介護のために本国への移住を決めた人もいた。ベトナムにおらず、親孝行ができなかったためリタイアしてから親を助けながら過ごしたいという気持ちもあったようだ。だが、日本での生活が不安定だった家庭も多い。渡日後はやくに夫を亡くした女性の場合、就職が難しい精神障害者の娘とともにベトナムに戻り、日本に残った子どもやベトナムの親類から援助を受けながら質素に生活をしていた。このケースからは、難民にとっての故郷が帰りにくい場所ではなく、生活苦に陥ったときに駆け込むことができるセイフティーネットとしても作用していることが伺える。

- 20代前半の1,5世、2世代（留学2名、就職8名）：

ベトナムで生活した経験がほとんどない20歳～30代半ばの若者が、留学や就労のためにベトナムで短期的・長期的に生活していた。日本で生まれ育った若者世代の場合、ベトナム語の読み書きが難しく、両親との会話も限られたものになりがちである。ベトナム語を学び、ベトナム社会を知り、自身のルーツを見つめ直そうとした人、幼少期のベトナムの親族訪問の楽しい記憶からベトナムに肯定的イメージをもち、ベトナムで暮らそうと語学留学を決心した若者など動機は様々であった。だが、大きく共通していたのはベトナム経済の発展に希望をもち、そこでの暮らしを肯定的に受け止めている人が多かったことである。その背景には、ベトナムにおける日本企業の進出が活発化していることがある。短期間の語学留学のうちに、現地の日系企業で就職する人も多かった。在日ベトナム難民以外にも、アジアで就職しようとする日本の若者たちは多い。大卒以上の学歴が求められる労働市場のなかで、ベトナム難民の若者は越日語の両言語を身につけ、どちらの文化背景や生活習慣に対する理解をもつ貴重な人材として認知され、重宝される存在となっていた。日本では就職差別にあうことも少なくない彼らにとって、ベトナムで就職することはその生きづらさを打破し、よりよい生活を築く手段でもあり、ベトナムの社会や文化習慣に直に触れることで自らのルーツを見つめ直すきっかけでもあった。ベトナムでは、在外ベトナム人は「越僑(Việt Kiều)」と呼ばれており、難民というネガティブなイメージではなく海外で教育を受けたバイリンガルな存在として眼差されている。その言葉はベトナムの日本人社会においても一般的なものとして普及している。社内において、越僑の若者たちはベトナム現地のベトナム人のワーカーから同じベトナム人であるにも関わらず待遇が異なるために嫉妬の対象とされることもあり、企業内でベトナム側にも日本側にも企業内でうまく立ち回る必要性を訴える人もいた。（この研究の途中成果は、“Life strategies of Vietnamese “refugees” in Japan: Their position between Vietnam and Japan during the late 2000s”として、Annual Conference of the East Asian Anthropology 2014にて発表した。）

また、若者世代の多くがベトナムでの生活が長引くにつれて、自身を「難民」ではなく「越僑」として自称することも多い。特に留学生として渡日した人の2世代は、当然ながら自身を難民と捉えておらず、ポートピープルとは異なる存在として位置づけていた。そう認識しながらも、ベトナム社会においては、日本出身のベトナム人として、その垣根を超えて様々な立場の「越僑」同士として交流する様子に立ち会えることもできた。これは、日本社会ではなくベトナムの小さな日本人社会のなかで出会うからこそその繋がりがあり、関係性のようにも見受けられた。欧米の元難民のベトナム人起業家は、ベトナム内外ですでに認知度が高い。日本生まれの若者世代がベトナム社会でどのように活躍していくのかには引き続き注目したい。

## ② 離散家族の再会とその後

- 残った家族の立場：ベトナムに残った家族に出国しなかった理由についてインタビューした。自分が出国したくとも、船に乗るための費用が工面できなかった人（船長に大金を払う必要があった）、家族内で年老いた両親の面倒をみる役割を担っていたためにベトナムを離れることができなかった人。単純に、ボートで海を出国することが怖かった人など理由は様々であった。南部政権の公務員や兵士の関係者を家族にもつ人は、公的機関では就労できず自営業を営む人が多かった。ホーチミンシティの郊外での調査が中心だったが、下宿先の近所のほとんどが家族や親類の誰かに難民がおり、南部社会において特別な存在ではないと実感させられた。行方不明のままになっている兄弟をもつ人も多く、ボートピープルに関するインタビューは、対象者との信頼関係はもちろん、申請者にとって非常に緊張感が伴うものだった。

- 海外の難民とのやりとり：90年代はじめまでは手紙でのやりとりも多かったが、時代が移り変わるごとに低額の国際電話やメールで連絡をとっていたようだ。海外の親類からの送金をうけ、戸建ての大きな家を建て、日本製の家電や衣類などを送ってもらうなどの援助をうけていた。2000年代半ば以降は、Skypeなどの無料通話が発達していき、故郷の家族とのコンタクトは容易となり、頻度も増加している。参与観察中も、毎日のように無料通話を使用して海外の兄弟と会話している人もいた。一方、ベトナム側の生活が安定したために送金の頻度や額は減少していた。また、海外の兄弟の仕送りは、両親に対するものであって「(兄弟である)わたしとは関係ない」という人も多く、家族内の関係性によってその援助の行き渡り方もまちまちであった。しかし、海外の兄弟からの援助で、家業の継続や拡大（エビ・カニの養殖場など）した人、海外の親類と連携し、新たなビジネスを始めていた（日本の中古車販売）人びともいた。

- トランスナショナルなネットワークの強化：残った兄弟の多くが、兄弟の居住国へ自身の子どもを留学させていた。その子どもが就職し、永住ビザを獲得してから、そこへ自身を呼び寄せ、さらに自身がさらに永住ビザを獲得して、他の子どもや孫を呼び寄せる移住計画は珍しくなかった。英語に比べて使用者数の少ない日本語が公用語である日本は、留学先としては選択されておらず、渡日する場合は親類に紹介してもらった日本の難民の配偶者になる場合がほとんどであった。加えて、日本へ移住する家族は、欧米にいる難民との関係が希薄か、親類がいない場合が多く、全体的に日本は移住先として不人気である印象をうけた。このことは、永住権取得の難しさなど移民に厳しい社会背景が反映していると考えられる。

ベトナムに残った親兄弟からすれば観光目的であったとしても、家族が住んでいる日本を訪問したいという気持ちもあり、その気持ちに応えようと親兄弟を積極的に日本へ招待している家族もいた。仕事で忙しくベトナムを訪問できないが、年老いた両親に対する親孝行をするために日本へ数ヶ月呼び寄せて、滞在させる家族もいた。別の家族では、兄弟が日本へ招待をしてくれないので不満をもらす者もおり、互いの生活状況への誤解や、過度な期待、気持ちのすれ違いを感じさせられる場面は多かった。

- 国境を超えた次世代へ向けた相互サポート：本国の家族は一方的に支援を受けていると見られてきたが、上述した若い世代との関係性まで視野を広げてみると、住む場所や移動手段の用意や、ビザの申請などで若者世代のベトナム暮らしを大きくサポートしていた。それらの行為が、海外に住む親類（若者世代の親）に対する「お返し」にも繋がっていた。

## 留学中の生活・研究でのトピックス

【留学生活】日本での調査で知り合った調査協力者（A氏）の姉家族が、外国人が入居できる下宿屋を営んでおられ、そこに下宿させていただくことになった。このおかげで、ベトナムに残った家族が他国に住む親類たちとどのような関係性を築きながら暮らしているのかを日常的に知ることができた。特に印象的な出来事だったのは、フランスやオーストラリア、アメリカ、日本に移住した越僑家族がベトナムの故郷を訪問した瞬間に立ち会えたことである。その大きな要因になったのはA氏の母親が亡くなり、A氏の兄妹姉妹が葬式に出席するために一同に介したことであった。亡くなったのが年末で旧正月の時期が近かったこともあり、なかなかベトナムに帰国することがない人びとに出会うことができたのは有意義であった。ほかにも、日本に定住しているベトナム難民ではないが、フランスに移住し33年ぶりにベトナムへ帰国した50代の女性に出会うことができた。彼女は、A氏の姉の夫の妹であった。（在日難民の遠い親戚である。）ベトナムに残った兄の娘（姪）の結婚式に参加することを決め、33年ぶりにベトナムへ帰国した。しかし、3ヶ月ほどの兄家族の家に滞在のなかで、生活習慣や考え方の違いから兄嫁（A氏の姉）と大げんかになり、兄の家を出ることになってしまった。父母が亡くなり、兄しかベトナムに身内のいない彼女にとって、兄の家を出るといことはベトナムにおける「実家」をなくしたこともある。しかし、生まれ育った路地を散歩しながら、かつてのクラスメイトや幼なじみを発見し、「家出」後は、その友人の家に身を寄せることになった。長らく故郷に帰れなかったベトナム人女性が連絡をとりあっていた家族ではなく、突然再会した「友人」たち新たな関係を築きあげていく過程を目の当たりにすることは、難民と故郷との繋がりを考えるうえで大きい示唆を与えられた。

②南部社会科学院での語学学習や学び：日本で学んだベトナム語教材は北部弁のものが多く、南部弁の取得は申請者にとってかなり難しかったが、言語学の専門家に北部方言と南部方言の違いや独特の言い回しなどを教えてもらうことができ、大いに助けられた。また、南部社会科学院で、北部出身者の研究者やスタッフに会う機会も多く、ベトナムの南部社会を別の角度から考える視点を得ることができた。

## 今後の社会貢献

最近のシリア難民の流出にもみられるとおり、難民受け入れはデメリットから語られる場合が多い。ベトナム難民の場合は本国政府が帰国を許可したことで、大きく本国社会との繋がりが強化され、活発化した。しかし、帰国が難しかったとしても、難民たちは何らかの形で故郷との繋がりを保とうとするだろう。今回のベトナム留学では、歴とは無関係に起業家精神をもち本国社会で仕事をする2世たち、余生を過ごす場としてベトナムを選んだ一世たちの生活とそのトランスナショナルな家族ネットワークを調査することができた。本国社会と日本社会の双方と繋がりながら、活躍するベトナム難民の姿は、しばしば難民支援の視点からは見逃されがちである。彼らが自ら自身の生活を切り開く生活戦略から難民が難民でなくなっていくプロセスを明らかにし、それらがどのような世界情勢と社会構造によって可能となっているのかを難民支援の現場に提示できる研究者になるように努めたい。

以上のような気づきは、ベトナム本国での生活を経験しなければ得ることができなかつた。このような貴重な学びの機会をくださった貴財団に心より御礼を申し上げます。



結婚の儀礼に参加。両家ともに家を飾り付ける。写真は、花嫁の家。花婿が花嫁を迎えにきた様子。  
ベトナムで出会い、オーストラリアに留学したカップルの結婚式。就職して、結婚。ベトナムで結婚式をあげた。  
この結婚式のために30年ぶりにベトナムに帰国した親類もいた。



ホーチミンシティの夜。高層ビルの建設が相次いでいる。



ホーチミンシティの戦争証跡博物館での1枚。兵士の青年たちと大学生の交流会。